

初期定住集落の姿を探る

—トルコ、ハッサンケイフ・ホユックにおける発掘調査—

三宅 裕 筑波大学人文社会系教授

Exploring an Early Sedentary Settlement: Excavations at Hasankeyf Höyük in Southeast Anatolia

MIYAKE, Yutaka Professor, Faculty of Humanities and Social Sciences, University of Tsukuba

初期定住集落の姿を探る—トルコ、ハッサンケイフ・ホユックにおける発掘調査—

1. はじめに

トルコ共和国南東部、ティグリス川上流域に位置するハッサンケイフ・ホユック遺跡は、新石器時代の初頭に居住された集落遺跡である。この遺跡が営まれたのは紀元前 9500~9000 年を中心とする時期であり、ヤンガー・ドリラス期の再寒冷期が終焉し、完新世の比較的温暖で安定した気候が始まる時期とほぼ一致する。

本遺跡の発掘調査は、トルコ国内ではティグリス川に計画された初の大型ダムである、ウルス・ダムの建設にともなう緊急調査として、2011 年から 6 シーズンにわたって実施された。ダムの建設工事は、文化財の保護を訴える反対運動の高まりやこの地域が抱える政情不安もあって、予定よりも大幅に遅れていたが、2019 年の夏にはついに竣工し、ティグリス川の河畔に位置する本遺跡も 2020 年の春に水没してしまった。これにより、本遺跡の調査は強制的に終了を迎えることとなり、これ以上の発掘調査の実施は望めなくなった。そこで、本稿ではこれまでに実施してきた調査の成果をまとめ、その意義について考えてみることにしたい。

2. 定住狩猟採集民社会

ハッサンケイフ・ホユック遺跡は約 3 ha の小規模な集落遺跡で、遺跡周囲の平坦面から約 8 m の高さを有すテル型遺跡である。遺跡の頂上部でも、地表面直下から新石器時代の層が検出され、後世の遺構としてはそこに掘り込まれた鉄器時代・ヘレニズム時代の土坑が確認されているのみである。遺跡の東側斜面下部に設定されたトレンチ(G15区)では、自然堆積層(砂層)まで到達することができ、この砂層の上面がほ

ぼ平坦であるとしたならば、新石器時代に形成された人為的な堆積層は最大で約 9.5 m にも及ぶことが明らかになった。

西アジアの遺跡の典型的な形である「テル」は、同じ場所に居住が繰り返されることによって形成されるもので、ヨルダンのハラネIV遺跡など、終末期旧石器時代の中期頃から認められるようになる。テル型の遺跡は遊動的な生活をおくる中では形成されにくいと考えられることから、定住化の過程がこの時期にまで遡る可能性が議論されている。ハッサンケイフ・ホユック遺跡において、新石器時代初頭の期間にこれだけの厚さの人為的堆積層が形成されているということは、定住を基本とする居住様式が長期にわたって継続的に営まれたことを示すと考えることができる。

こうした評価は、ハッサンケイフ・ホユック遺跡から検出された、住居跡と考えられる遺構の状況からも支持される。新石器時代の層位は少なくとも 2 つの時期に区分することができ、下層に当たる第 1 期では遺構の平面形が円形であるのに対し、上層の第 2 期になると隅丸方形へと変化する。遺構の平面形は異なっているものの、いずれも堅穴状の半地下式構造であることは同じであり、構築技術にも大きな違いはみられない。西アジアの広範な地域において、先土器新石器時代 A (PPNA) 期から PPNB 期へと移り変わる頃に、住居跡が円形の半地下式構造から方形の地上式建物へと変化することを考えると、本遺跡の第 2 期の遺構はそうした大きな変化の過程の中の過渡期的段階にあると評価することができる。

堅穴の深さは遺構によって異なるものの、残りのよいものでは約 2 m の深さに及ぶものもある。壁は今でもティグリス川の河原で採取できるような石灰岩の川原石を中心に構築され、その内面には黄褐色の粘土

が厚くコーティングされる。この粘土は乾燥して硬化するとたいへん堅緻になり、それが壁の目地土にも利用されていることから、遺構の地下部分は堅固なつくりとなっている。このように、堅穴の掘削にはじまり、大量の石や粘土の調達、屋根などの上部構造の構築など、住居の建造には相当の労力が投入されており、ある程度恒久性の高い建物であったとみることができる。

遺跡中央部の発掘区では、特に第1期に帰属する円形の遺構が互いに接するように密集した状態で検出されている。発掘調査と並行して実施した、磁気探査や地中レーダー(GPR)による地中探査によって、こうした遺構が発掘区外においても密度高く分布していることが明らかになり(辰巳2020; Tatsumi 2020)、コンパクトではあるがある程度の人口規模をもった集落が形成されていたと考えられる。こうした円形の半地下式建物は頻繁に建替えが行われていたことも確認されており、その方法としては本来の建物の壁に部分的に新たな壁を付け加える場合と、遺構全体をひと回り小さくし、内側に壁を新たに構築し直す場合とがある。その結果として、建物が規模を縮小させながら、同じ場所に入れ子状に検出されるケースも少なくない。このような頻繁な建替えが行われていたことは、長期にわたる継続的な居住の証と捉えることができるとともに、それぞれの世帯が自由に家を建てるのが許されないような、集落内の場に関して何らかの社会的規制があったことを示している可能性もある。

ひとつの集落が通年にわたって居住されていたことを考古学的証拠に基づいて証明することは、思いのほか難しい面がある。ハッサンケイフ・ホユック遺跡の場合も、上記のような人為的な堆積層の厚さ、恒久性の高い建物の存在に加え、150基近い埋葬が検出されていることや貯蔵用施設と考えられる遺構が存在することなど、定住度の高さを示すと思われる資料は多く認められるものの、これらはあくまでも状況証拠にとどまるものである。しかし、ティグリス川上流域の同時期の遺跡であるハラン・チェミでは、淡水産の貝類の成長線分析や渡り鳥の骨の分析が行われ、春夏秋冬それぞれの季節においてこれらの捕獲活動が行われていたことが明らかになっている。ハッサンケイフ・ホユック遺跡では、季節性をめぐるこうした証拠はまだ得られていないものの、総合的に判断してハラン・チェミ遺跡同様に、通年にわたって居住されていたとみるのが妥当であると思われる。

出土した動植物資料の分析結果に基づく、こうし

た定住集落を営んだ集団は基本的に狩猟採集民であったと評価することができる。西アジアにおいて新石器時代は農耕・牧畜による食料生産が開始された時代とされるが、ハッサンケイフ・ホユック遺跡は編年上では新石器時代の初頭に位置付けられるものの、実際には農耕・牧畜を営んでいたような証拠はまだ認められない。植物遺存体としては、ピスタチオ、アーモンド、エノキなどの実が全体の約75%を占め、それにレンズマメやビターベッチなどのマメ類が加わる。これらは野生の植物であり、採集によって獲得されていたものとみることができる。新石器時代の初頭に、ユーフラテス川中流域や南レヴァントでは、形態的には野生型の穀物を栽培する「プレドメスティケーション栽培」が行われていた可能性が指摘されているが、ハッサンケイフ・ホユック遺跡をはじめとするティグリス川上流域の遺跡では、コムギやオオムギの出土数自体が大変限定的であり、プレドメスティケーション栽培が重要な役割を果たしていたとは考えにくい状況にある。

動物骨については、ヒツジとヤギが最も多く、哺乳動物全体の約60%を占めている(本郷2018; Hongo et al. 2020)。特にヒツジの割合が高いが、両者ともに形態的には野生であることが確認されている。ほかにはイノシシ(約10%)やアカシカ、ガゼルが認められ、キツネやウサギなどの小型動物も利用されていた。また、コイ科を中心に淡水魚の骨も大量に出土しており、集落の目の前を流れるティグリス川の水産資源もさかんに利用されていたと考えられる。実際、出土人骨の炭素・窒素安定同位体比分析からは、魚をはじめとする水産資源が当時の人々の食性においてある程度重要な位置を占めていたことも確認されている(Itahashi et al. 2017)。

3. 複雑な狩猟採集民社会

ここまでみてきたように、ハッサンケイフ・ホユックは新石器時代初頭の遺跡ではあるものの、基本的には狩猟採集民によって居住された定住集落であったと考えられる。興味深いのは、狩猟採集民社会に対して一般にイメージされるような、単純で平等主義的な社会であったようにはみえないことで、ある程度社会の複雑化が進んでいたことをうかがわせる資料も得られている。「複雑な狩猟採集民(complex hunter-gatherers)」として認識しておくことが、妥当であると思われる。

公共建造物

まずあげなくてはならないのは、公共建造物的な性格をもっていたと考えられる特別な建物の存在である。ハッサンケイフ・ホユック遺跡では、集落の中央部から一般の住居跡よりも規模が大きく、住居跡にはみられない特別な施設をともなう遺構が検出されている。第1期と第2期のいずれの時期にも認められ、建物の平面形はその時期の住居跡と対応するように、円形から隅丸方形へと変化している。

第2期の特別な建物と考えられる3号建物は、一辺が約9mの正方形に近い形状をした大型遺構で、石灰岩の板石による立石、粘土による基壇状の施設、蓋石をともなう水路状の施設などの特別な施設が付属している。建物内にみられる立石というと、ギョベクリ・テペ遺跡やネヴァル・チョリ遺跡などのT字形石柱が想起されるが、ティグリス川上流域においてもチャヨニユ遺跡やグシル・ホユック遺跡から立石をともなう建物が検出されている。これらの建物は儀礼祭祀にかかわる公共建造物的性格をもつと解釈されており、ハッサンケイフ・ホユック遺跡の3号建物も同様の性格をもった遺構であると考えられることができる。

この3号建物の下層からは、第1期に帰属する円形の特別な建物が、少しずつ位置をずらしながら上下に重なるように検出されている。これまでに7基ほどが確認されているが、さらに下層へと続いていることが明らかになっており、集落のほぼ中央にあたるこの場所が特別な空間として意識され、それが長期にわたり継承されていたことをうかがわせる。これらの建物の直径は7m前後で、同時期の住居跡よりも規模が大きく、礫が密に敷かれたプラットフォーム状の施設をともなうものや壁の内面にコーティングされた粘土に白色プラスターが塗られている例も認められる。

葬制と副葬品

ハッサンケイフ・ホユック遺跡では150基近い新石器時代の埋葬が確認され、これも長期にわたって継続的に居住が営まれたことを示唆するものであることは、すでに指摘しておいた。中には表層近くから検出され、建物との関係が不明な事例もあるものの、そのほとんどが建物の床下から発見されている。遺構が半地下式の構造であることから、廢屋墓であった可能性は低いと考えられ、人々が日常生活をおくっていた家は、同時に「死者のための家」でもあったことになる。ひとつの建物から複数の埋葬が検出される例も多く、その

多くが壁際から見つかったことは、死者をどこに埋葬すべきか明確なルールがあったことをうかがわせる。また、人骨の分析では年齢や性別による偏りは確認されておらず、おそらく集団の成員は分け隔てなく、集落内の建物の床下に埋葬されたものと思われる。しかし、その一方で上記の特別な建物からも墓は検出されており、埋葬される場に基づく差違はあったと考えられる(三宅2020)。

また、人骨の表面に赤色と黒色の顔料で彩色が施されている事例も認められ、そうした彩色人骨は全体の約4割を占めている。彩色は帯状あるいは線状のモチーフが連続的に施されるもので、単色のものと赤色・黒色が組み合わされている場合とがある。これらの彩色は比較的鮮明でモチーフの崩れなどもみられないことから、人骨の上に直接施されたと考えられ、一度遺体を埋葬するなどして、軟部組織が無くなるのを待ってから行われたと想定される。こうした扱いを受けている人骨の割合が比較的高いことに加え、性別や年齢による有意な偏りもみられないことから、特別な地位にある人物や有力な集団に帰属する人物を対象とした特別な扱いであったとは考えにくい。ティグリス川上流域の同時期の遺跡からも類例が知られており、むしろこの地域における一般的な葬制のあり方であったと考えるべきと思われる。当時の人々にとっての死は、現代の私たちが認識する生物学的な死とは異なるものであったと考えられ、おそらく彩色を施して再度埋葬されることによってその過程が完了すると見做されていたのだろう。

新石器時代の埋葬のうち、副葬品を伴うものは全体の約23%にとどまる。副葬品として多いのは装身具であり、第1期では貝製のビーズが中心であったが、第2期になると石製ビーズが主体的になる。装身具の素材とされた貝種には、*Nassarius gibbosulus*(ヨフバイ科)や*Conus* sp.(イモガイ科)のような地中海産のものと*Theodoxus* sp.(アマオブネガイ科)のように淡水産のものがある。いくつかの貝種を欠いてはいるものの、地中海産と考えられる2種の貝はユーフラテス川中流域の同時期の遺跡においても認められるものであり、地中海から直線距離にして480km内陸に位置しているハッサンケイフ・ホユック遺跡も広域的な交易ネットワークの中に組み込まれていたことを示している。ちなみに、ティグリス川上流域は地中海産貝製ビーズの分布域の東限に当たるとみられ、500kmという距離も海産貝類が運ばれた距離としては新石器

時代では最長の部類に入る。先史時代においては、市場経済のように物資が商品として独立して流通していたとは考えにくく、希少物資の入手を強く希求する社会の形成が前提としてあり、その結果として物資が広域に流通することになったと考えられる。リーダーやエリート層の形成といった社会的不平等の進行が、その背後にはあると思われる。それがもつ社会的意味合いにはやや違いがあったかもしれないが、黒曜石も広域に流通していた物資であり、東アナトリアの産地の黒曜石が遺跡にもたらされていたことも確認されている (Carter et al. 2021)。

副葬品としては、ほかにも石製のバトンや棍棒頭のように威信財的性格をもつと考えられるもの、サソリやヘビなどの動物像が表現された象徴的意味の付与された特別な器物、クロライト製の石製容器や石製装身具のように高度な工芸技術を示す遺物も出土している。同時期のキョルティック・テペ遺跡では、クロライト製の石製容器が数百点出土していることから、専門性の高い生産体制が構築されていた可能性も想定することができる。

4. まとめ

西アジアにおいて、新石器時代は農耕牧畜による食料生産が開始された時代と定義され、「新石器革命」という用語に象徴されるように、農耕牧畜に基盤を置く社会の成立は、社会を大きく変容させる契機となったとして、その意義が高く評価されてきた。狩猟採集から農耕牧畜への移行を人類史における一大画期と捉えるこうした見解は、現代の一般社会においてもすでに常識として受け入れられている感があり、考古学に携わる研究者であっても大きな違いはないように見受けられる。しかし、そこには「狩猟採集経済の生産性には限界があり、農耕牧畜により食料の生産力は大きく向上する」という考えが前提としてあることを見逃すべきではない。

文化人類学者である M. サーリンズは、その著書『石器時代の経済学』の中で、農耕の生産性について興味深い指摘をしている。それは、農耕社会であってもすべての社会が高い生産性を実現しているわけではなく、「過少生産構造」と言えるような、必要以上には労働力を投入せず、生計を維持できる程度の生産レベルで済ませている(満足している)社会も多くみられるというものである。そうした社会で機能しているのは、不要なものは生産しないという「反余剰のシステ

ム」であり、そこから脱却し余剰を生み出すシステムが機能するためには、政治的な圧力が働く必要があるとしている。すなわち、農耕を営むようになれば自動的に生産力が高まるわけではなく、その潜在力を引き出すためには多くの労働力を投入しなくてはならず、人々をそう仕向けるには何らかの社会的な圧力が必要になるということである。このように、農耕の開始と高い生産性の実現は、必ずしも同義ではないということをもつて認識しておくべきである。

古代において都市や国家を生み出した社会がいずれも農耕牧畜を基盤としていたことは間違いないが、西アジアにおいて農耕社会が成立してから都市が誕生するまでに、3千年以上もの年月を要していることは、あまり注目されることがない。地域によってはさらに長い期間を要しているところもあり、農耕を早くから受容していながらも、独自には都市化の方向へ歩を進めなかった地域・社会も少なくない。こうした事実を前にすると、サーリンズの指摘はたいへん大きな意味をもってくると思われ、社会を変容させる要因として注目すべきは、農耕牧畜による食料生産システムの確立そのものではなく、その中において労働を強化させる方向へと働く社会的な圧力、あるいはそのメカニズムということになる。

そうした意味において、ハッサンケイフ・ホユック遺跡を通してみてきたように、新石器時代初頭の定住狩猟採集民社会がある程度社会の複雑化を進展させていたことは、私たちに多くの示唆を与えてくれる。また、その時期にギョバックリ・テペ遺跡のような祭祀センターと考えられる遺跡が存在し、モニュメントと呼ぶにふさわしい大規模な建造物が造営されていたことは、社会の複雑化のスケールが想像をはるかに超えるものであったことを示している。新石器時代初頭の社会の複雑化は、その後の農耕社会でも長らく比肩するものがないほどのレベルにあったと評価することができ、それを凌ぐ社会の出現は都市化が本格化する前4千年紀を待たなくてはならない。

こうした新石器時代初頭の事例からは、まず社会の複雑化にとって食料生産経済の確立は必ずしもその前提条件にはならないということを確認できる。狩猟採集経済においても生産の強化は可能であったと考えられ、社会的な余剰は公共建造物の造営や儀礼祭祀、威信財を含む特別な器物の生産、長距離交易による希少な物資の入手など、多様な活動に振り向けられていたものと思われる。そして、もうひとつ注目されるのが、

新石器時代の初頭において儀礼祭祀が社会にとっての主要な関心事であり、それが常に社会の中心にあったとみられることである。それぞれの集落においては一般の住居跡とは異なる特別な建物が存在し、そこには特別な施設も設けられていることから、集落を核とする集団の儀礼祭祀の場であったと考えることができる。さらに、そうした特別な建物が独立して集散的に造営された祭祀センター的遺跡が存在することは、儀礼祭祀のために注がれたエネルギーが多量なものであったことを物語っている。それらの建物はイデオロギーを可視化する装置であり、その造営を含めそこで催行される儀礼祭祀は社会を統合する役割を果たしていたと考えられると同時に、その催行を掌握する人物や特定の集団の権威を高める働きももっていた可能性がある。そうした社会的不平等の進行が、特別な器物の生産や遠隔地の希少物資の入手を促したと考えることができる。労働の強化の方向へと働いた社会的圧力に、儀礼祭祀が大きく関係していた可能性は高い。その意味において、前4千年紀の都市化の過程においても神殿とされる規模の大きな建物が造営されていることは示唆的であると思われる。

■参考文献

・ Carter, T., R. Moir, T. Wong, K. Campeau, Y. Miyake and O.

- Maeda 2021 Hunter-fisher-gatherer river transportation: Insights from sourcing the obsidian of Hasankeyf Höyük, a Pre-Pottery Neolithic A village on the Upper Tigris (SE Turkey). *Quaternary International* 574: 27-42.
- ・ Hongo, H., S. Arai, R. Takahashi and C. Y. Gündem 2020 Transition to food production suspended - a remarkable development in the eastern Upper Tigris Valley, southeastern Anatolia. In Peters, J., McGlynn, G. and V. Goebel (eds.), *Animals: Cultural Identifiers in Ancient Societies? Proceedings of the 2016 International Symposium, Munich, Germany. Documenta Archaeologicae* 15. Rahden/Westf., Leidorf: 155-172.
- ・ Itahashi, Y., Y. Miyake, O. Maeda, O. Kondo, H. Hongo, W. Van Neer, Y. Chikaraishi, N. Ohkouchi and M. Yoneda 2017 Preference for fish in a Neolithic hunter-gatherer community of the upper Tigris, elucidated by amino acid $\delta^{15}\text{N}$ analysis. *Journal of Archaeological Science* 82: 40-49.
- ・ Tatsumi Y. 2020 A Neolithic sedentary hunter-gatherer settlement with densely arranged buildings: results of geophysical prospection at Hasankeyf Höyük in south-eastern Anatolia. *Archaeological Prospection* 27: 329-342 (<https://doi.org/10.1002/arp.1777>).
- ・ 辰巳祐樹 2020「西アジア新石器時代の定住狩猟採集民の集落に関する一考察」常木晃先生退職記念論文集編集委員会(編)『世界と日本の考古学—オリーブの林と赤い大地—』35-45頁 六一書房。
- ・ 本郷一美 2018「家畜化は肉食に貢献したか—狩猟から牧畜への肉食行為の変化」野林厚志(編)『肉食行為の研究』187-211頁 平凡社。
- ・ 三宅 裕 2020「葬制からみる西アジア先土器新石器時代の社会—ハッサンケイフ・ホユック遺跡の事例から—」常木晃先生退職記念論文集編集委員会編『世界と日本の考古学—オリーブの林と赤い大地—』3-18頁 六一書房。